

評価の時代



大阪府立大学学長

南 努

戸惑いを覚えるほど、世の中の変化が激しい。ソ連という国がなくなって多くの独立国ができ、ロシアという国に戻ったとき、平時（地球上に紛争や地域的な戦争がないという意味ではない）にこのようなことが実現したことに驚いた。

同じ文脈で言えば東西ドイツの区別が無くなって、ドイツになったことも驚きであった。ある国際会議で、親しい西ドイツの方と話しをしていたとき、東西ドイツが一つになることはあり得ないと聞いて余り時間が経っていなかった。

これらの国の人々の苦勞に比べれば、今の日本で起っている変化などは、まだまだ序の口と見ていいのだろうか。「改革」というキーワードを最優先して登場したと思える小泉政権の改革の足取りも、なんとなく先行きが心もとない。

一方で大学に対して吹く風もいよいよ厳しくなってきた。日本の高等教育の制度は、これで3度目の大変革をしている。第1回は明治維新における学制の立ち上げのとき、第2回は戦後の学制改革のとき、この2つはいずれも外圧による大きな社会システムの変革に伴うものであった。第3回が今回である。そのきっかけは、外圧によるのではなく、むしろ内発的なものである。平成3年に始まった「大綱化」というスローガンのもとに、教養課程と専門課程の枠を無くすことであった。それに引き続いて、旧制帝国大学を中心に「大学院重点化・部局化」が推し進められ、ここら辺りで終息とまでいかなくても、休息するのかなと推測した。

ところがここに、財政状態の悪化が重なって、行政改革の必要から、国立大学の「独立行政法人化」ということが急浮上した。大学関係者の強い反対にもかかわらず、これが進行した。「行政」という文字はいくら何でも具合が悪いということで、「国立大学法人化」ということが、具体的な問題として俎上にのぼっている。ご存知のとおり、平成15年には法整備をして、平成16年4月の実施というスケジュールが決まっている。

さらに追い打ちをかけるように、「トップ30（名称は21世紀COEに変更されている）」というプランが出てきて、大学関係者を高温のルツボの中にたたき込むごとく、混乱の渦

に巻き込んでいる。財政問題ということをし少し横に置くと、これらの一連の大騒動は、大学だけをカヤの外に置くのではなく、世の中の激しい動きを経験させよ、競争原理を持ち込め、つまるところ、「評価」をきっちりせよ、ということに尽きるように思う。

しかしこの「評価」ということほど難しいことはない、つくづく思っている。そんなことを思っている矢先に、朝日新聞（平成 14 年 4 月 25 日夕刊）に、「評価の評価」と題したコラム記事が出ていた。文部科学省の大学評価・学位授与機構が発表した国立大学に対する評価を見て、「質の判定」はいかにも難しいと感じたと書かれている。この記事に触発されて、今回の寄稿依頼に対して、「評価」ということをテーマにして書こうと思った。

正直なところ、日本の社会全体にフェアな評価をする習慣が本当に根づいているか若干の不安もある。現状は何となくアメリカ方式の焼き直しという感じが否めない。日本に合った評価方法が確立するまでには、少し時間がかかると考えるべきだろうか。

1980 年代の後半、日本が経済的に成功し、世界から大いに注目された時期があった。当時は今ほど「評価」、「評価」とは言っていなかったと思う。世の中がうまくいっているときは、そんなことは言わなくてもよいと解釈することができる。ニューガラスフォーラムができたのは、丁度その頃であった。設立間もなく、1986 年に、ニューガラスに関する調査団がアメリカに派遣され、その団長を務めさせていただいた（New Glass, No. 5, pp. 4-11, 1987 参照）。その後もニューガラスフォーラムと長く、深くかわりを持つことができたことは、私として大変大きな財産であり、心から感謝している。今にして、あの調査団の経験は、大変楽しい思い出である。

その後バブルが急速にはじけて、日本全体が失速した。「評価」の方法が確立しないままに、日本全体が浮かれてしまったからだろうか。もう一度しっかり足元を見定めて、身の丈にあった思考をし、世界から尊敬される国になりたいものである。